



>> 愛媛大学 - Ehime University

Title	幼児のソシオメトリック地位の長期的持続と変動：幼稚園児から小学5年生までの5年間比較
Author(s)	前田, 健一
Citation	愛媛大学教育学部紀要. 第I部, 教育科学. vol.45, no.2, p.105-117
Issue Date	1999-02-28
URL	http://iyokan.lib.ehime-u.ac.jp/dspace/handle/iyokan/2636
Rights	
Note	

This document is downloaded at: 2017-10-15 14:44:15

幼児のソシオメトリック地位の長期的持続と変動

—— 幼稚園児から小学5年生までの5年間比較 ——

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成10年9月30日受理)

Long-term continuities and changes in young children's sociometric status : Comparison among five intervals from kindergarten to grade five children

Kenichi MAEDA

子どもの仲間関係における諸問題やその原因を考える場合、発達的にさかのぼると、幼少期からの子どもの気質や個性、育てられ方や多様な経験、あるいはそれらを取り巻く親子関係、兄弟関係、仲間関係などの複合した要因の影響を検討しなければならない。したがって、仲間関係の発達研究を行うときには、これらの多様な要因を考慮すると同時に、仲間関係に問題を抱えやすい子どもの研究をどの時点から開始すべきかという重要かつ困難な発達的問題に対処していかなければならない。そのためか、現実実施されてきた従来の研究では、最初に子どもの現在の仲間関係をとらえ、仲間集団に適応し、仲間とうまく交流している子どもとそうでない子どもの個人差に注目して、仲間適応児とそうでない子の間にどのような相違があるかを比較検討してきた (Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; Hymel & Rubin, 1985; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993)。それらの研究によると、仲間から人気のある子ども (人気児) や平均的な子ども (平均児) と比べて、仲間から拒否されやすい子ども (拒否児) は、積極的に仲間と相互作用をするが、相互作用の質が不適切であることが多いと指摘されている。また、拒否児は一般に、攻撃的であり、社交性に乏しく、社会的スキルや認知的スキルが未熟であることが多い。他方、仲間から無視されやすい存在感の乏しい子ども (無視児) は、全般におとなしく、仲間との相互作用や会話が少なく、自分から仲間の遊びに仲間入りすることも少なく、独り遊びが多い。攻撃的な行動はほとんど示さないが、向社会的スキルも少ない傾向にあると報告されている。

ソシオメトリック指名法や評定法は、現在の仲間関係に適応している子どもとそうでない子どもを識別する方法として頻繁に使用されてきた (McConnell & Odom, 1986)。上述の研究結果からも実証されるように、ソシオメトリック法は子どもの仲間関係の個人差を識別するの

に有効であり、多くの妥当で有益な情報を提供することが確かめられている。しかし、ソシオメトリック法は、あくまで実施した時点における仲間関係の個人差を大別する手段であり、識別された地位がいつまでも変動しないという保証はない。おそらく、ソシオメトリック法に基づいて識別される人気児や拒否児のような仲間集団内の地位それ自体も、子どもの発達や時間的経過、あるいは子どもの所属する集団の変化などに応じて、変動するであろう。あるいは一定の時間経過の間に、子どもの認知スキルや社会的スキルが実際に変化し、その結果として彼らの地位が変動することも考えられる。このように考えると、ソシオメトリック法を使用した仲間関係の研究では、人気児や拒否児の地位と関連する要因を検討するだけでなく、それらの地位自体が子どもの発達や時間的経過に伴ってどの程度変動していくのかを明らかにする必要がある。後者の地位変動の問題を検討するためには、同じ子どもたちを対象にして、ソシオメトリック法を定期的に実施し、子どもの地位の変動を追跡的に検討する縦断的研究が求められる。

Coie & Dodge (1983) は、小学3年生と5年生を対象にして、毎年1回ずつソシオメトリック指名法を実施し、4年間にわたる地位の維持者率と変動者率を調べている。それによると、人気児の地位維持者率は1年間で36%、2年間で28%、3年間で34%、4年間で21%となり、期間が長くなるにつれて少し低下するものの、長期的に安定していた。拒否児の地位維持者率も1年間で45%、2年間で34%、3年間で34%、4年間で30%となり、人気児以上に長期的な安定性が高かった。それに対して、無視児の地位維持者率は1年間で25%、2年間で27%、3年間で22%、4年間で24%となり、1年間の期間だけを見ても人気児や拒否児よりも維持者率は低かった。前田 (1997) は、幼稚園の年中児から年長児にかけて約半年間隔を置いてソシオメトリック指名法を4回実施し、幼児期における地位の維持者率と変動者率を検討している。その結果、人気児の地位維持者率は半年間で69.4%、1年間で58.2%、1年半間で64.4%となり、期間が長くなってもほとんど低下しなかった。また、拒否児の地位維持者率も半年間で60.0%、1年間で56.5%、1年半間で58.6%となり、人気児と同様に長期的な安定性が高かった。それに対して、無視児の地位維持者率は半年間で18.6%、1年間で3.2%、1年半間で13.2%となり、最も短い半年間の期間からすでに無視児の地位を維持する者は少なく、他の地位へ容易に変動しやすいことがわかった。これらの研究結果は、幼児期から小学校や中学校にかけて、人気児や拒否児は一定の期間を経ても同一の地位を維持しやすく、単に期間が長くなるだけでは容易に変動しにくいことを実証するものである。

本研究では、前田 (1997) の研究よりも期間をさらに拡大して、幼稚園の年長児時点から小学校1年生までの1年間、2年生までの2年間、3年生までの3年間、4年生までの4年間および5年生までの5年間の5つの期間を比較し、幼児期の地位がどの程度の期間まで維持されやすいのかを検討する。ただし、本研究では Coie & Dodge (1983) や前田 (1997) のように同一の対象児を経年的に追跡し、ソシオメトリック法を数回ずつ実施するやり方を採用しなかった。本研究では1年間～5年間の5つの期間に対応して、異なる5つの対象集団のデータを使用した。5つの対象集団は、いずれも縦断的研究の起点を幼稚園の年長児時点とする点では共通しているが、縦断的研究の終点が1年後～5年後と異なっている。つまり、1年間～5年間の各期間の相違に対応して、対象集団も異なることになる。したがって、同一対象集団を経年的に追跡する縦断的研究の場合と異なり、起点となる幼稚園の年長児時点の地位分類結果も5つの対象集団間で異なる可能性がある。このような問題はあつたものの、本研究の結果は5

つの対象集団の比較を通して、幼児期の地位がどの程度の期間にわたって維持されるか、いつ頃から変動しやすいのかについて貴重な情報を提供するものと考えられる。あわせて、本研究では5つのソシオメトリック地位得点について、1年間～5年間の各期間ごとの縦断的相関係数を算出し、地位分類をしない相関分析からも、地位の安定性や変動性について検討を加える。

方 法

対象児 本研究の対象集団は5つの異なる集団である。表1は、これら5つの対象集団の男女別と男女全体の人数、1回目と2回目のソシオメトリック調査時期および1回目から2回目までの期間をまとめたものである。いずれの集団においても、表1の人数は幼児時点と小学校の各学年時点の両調査データが揃っている者だけを抽出した人数を示している。表1からわかるように、いずれの対象集団も幼稚園の年長児時点において1回目のソシオメトリック調査を受けている点で共通しているが、2回目のソシオメトリック調査を受けるまでの期間が異なり、約1年間から5年間にわたっている。

表1 5つの集団のソシオメトリック調査実施時期と人数内訳

	ソシオメトリック調査実施時期			人数内訳		
	1回目	2回目	期 間	男児	女児	全体
A集団	幼稚園の年長児(11月)→小1(12月)		1年間	29	30	59
B集団	幼稚園の年長児(11月)→小2(11月)		2年間	28	26	54
C集団	幼稚園の年長児(11月)→小3(12月)		3年間	29	28	57
D集団	幼稚園の年長児(11月)→小4(12月)		4年間	28	24	52
E集団	幼稚園の年長児(11月)→小5(12月)		5年間	30	27	57

材 料 (1)幼児の個別カラー写真カード：幼児時点における写真ソシオメトリック指名法と評定法では、各幼児の個別カラー写真を使用した。写真は、一人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5cm×横4cmの大きさにプリントした。さらに、各写真を縦6.5cm×横5cmの白色厚紙に貼り付けて個別写真カードを作成した。

(2)分類箱：幼児時点の写真ソシオメトリック評定法では、3つの分類箱を使用した。各箱は底面積が12cm×12cm、3つの側面の高さが5cm、残り1側面の高さが12cmの蓋のない容器形であった。各箱には、高さ12cmの側面の内側面に、それぞれ3色の画用紙に描いたハッピーな顔(ピンク色)、ニュートラルな顔(黄色)、悲しそうな顔(青色)の表情略線画が貼り付けてあった。

手続き 幼児時点の写真ソシオメトリック調査は個別面接で実施した。小学生時点では各クラス単位に集団で一斉に実施した。

(1)幼児時点の写真ソシオメトリック指名法：対象児の写真カードを除く残りの同性仲間全員の写真カードを机上にはぼランダムな順に縦4枚×横4枚に配列して提示し、次の質問をしながら肯定的指名を3名以内まで選ばせた。「この中で、○○ちゃん(対象児名)が幼稚園で遊ぶとき、1番目に(2番目に、3番目に)一緒に遊びたい人は誰ですか。」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名まで選ばせた。「今度はこの中で、○○ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番目に(2番目に、3番目に)一緒に遊びたくない人

は誰ですか。」

(2)幼児時点の写真ソシオメトリック評定法：まず机上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て右側にハッピーな顔の箱，左側に悲しそうな顔の箱，中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が分類しやすいと考え，どの対象児にも箱の提示位置を一定にした。対象児の写真カードを除く残りの同性仲間全員の写真カードをほぼランダムな順に束ねた後，次の教示を与えて写真カードを1枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は，△△組（対象児の組名）のお友だちの写真を1枚ずつ○○ちゃんに渡します。○○ちゃんは，写真のお友だちをよく見て，○○ちゃんが幼稚園で一緒に遊びたい子だなと思ったら，この箱（ハッピーな顔の箱）に入れて下さい。遊びたくない子だなと思ったら，この箱（悲しそうな顔の箱）に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないかわからないなと思ったら，この箱（ニュートラルな顔の箱）に入れて下さい。それでは，この写真の子はどの箱に入れますか？」

(3)小学生時点のソシオメトリック指名法：クラスの男子には男子全員の名簿を，女子には女子全員の名簿を印刷して渡し，「小学校で一緒に遊びたい子」（肯定的指名）と「小学校で一緒に遊びたくない子」（否定的指名）をそれぞれ3名以内ずつ選んで，その名簿番号を回答欄に記入するように求めた。

(4)小学生時点のソシオメトリック評定法：(3)と同様に同性の仲間全員の名簿を印刷して渡し，「あなたはクラスのお友達と，どのくらい一緒に遊びたいと思っていますか」と質問して，同性仲間全員について3段階で評定させた。評定方法は「遊びたい子」には◎を，「あまり，遊びたくない子」には△を，「どっちかという，遊びたい子」には○を付けさせた。

得点化の方法 (1)ソシオメトリック指名法の得点：対象児ごとに，仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。これらの集計した肯定的指名数と否定的指名数について，本人を除くクラスの同性仲間数で除算し，仲間1人当たりからの指名数を算出した。その後，男女別に幼児時点では2クラス全体の平均値とSDに基づいて，小学生時点では3クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点に変換した。次に，この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点，否定的指名得点=D得点）から，社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれている程度を，D得点は仲間から積極的に拒否されている程度を表す。SP得点とSI得点はそれぞれL得点とD得点の合成得点であるが，SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差（距離）を表し，SI得点は好かれるか拒否されるかにかかわらず仲間への影響力が強く，仲間の中で無視できない存在である程度を表す。

(2)ソシオメトリック評定法の得点：幼児時点では，仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を，ニュートラルの顔の箱に分類された場合に評定値2を，悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し，評定値の合計得点を対象児ごとに求めた。小学生時点では，仲間から◎を付けられた場合に評定値3を，○を付けられた場合に評定値2を，△を付けられた場合に評定値1を配点し，評定値の合計得点を対象児ごとに求めた。その後，仲間から受けた評定値の合計得点を評定した仲間の人数で除算し，平均評定値を算出した。この平均評定値は，仲間から受容される程度を表す一次元的な指標と考えられている（Hughes, 1990；Hymel & Rubin, 1985）。

地位群分類の方法 地位群の分類は，Coie & Dodge (1988) の分類方法に従った。テスト

時期別に、ソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点およびSI得点に基づいて各対象児を5つの地位群のいずれかに分類した。各地位群の分類基準は、人気児（SP>1, L>0, D<0）、拒否児（SP<-1, L<0, D>0）、平均児（-1<SP<1, -1<SI<1）、無視児（SI<-1, L<0, D<0）、両論児（SI>1, L>0, D>0）である。人気児は多くの仲間から好かれ、拒否されることの少ない子どもたちである。拒否児は人気児と反対の傾向を示し、多くの仲間から拒否されやすい子どもたちである。平均児は好かれる程度も拒否される程度も平均的な子どもたちである。無視児は好かれることも拒否されることも少ない子どもたちである。なお両論児は、ある仲間からは好かれるが別の仲間からは拒否される子どもたちである。いわば、仲間の意見が賛否両論に分かれる子どもたちである。

結 果

ソシオメトリック地位得点の縦断的相関係数

表2は、対象集団別にソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点および評定法の平均評定値のそれぞれについて、1回目と2回目間の縦断的相関係数をまとめたものである。

(1)同一得点における異なる期間の比較 表2の相関値に基づいて、相関値の絶対値の差を縦に比較してみると、L得点では1年間（ $r = .608$ ）と2年間（ $r = .437$ ）の間には有意差が見られない。しかし、1年間（ $r = .608$ ）は3年間（ $r = .100$ ）、4年間（ $r = .230$ ）、5年間（ $r = .170$ ）よりもそれぞれ有意に高かった（順に $z = 3.19, p < .01$ ； $z = 2.43, p < .05$ ； $z = 2.82, p < .01$ ）。また、2年間（ $r = .437$ ）は3年間（ $r = .100$ ）よりも高い傾向にあった（ $z = 1.87, p < .10$ ）。D得点では1年間（ $r = .567$ ）は4年間（ $r = .207$ ）や5年間（ $r = .249$ ）よりも有意に高かった（順に $z = 2.21, p < .05$ ； $z = 2.02, p < .05$ ）が、1年間（ $r = .567$ ）、2年間（ $r = .402$ ）および3年間（ $r = .435$ ）の3期間の間には有意差がなかった。SP得点では1年間（ $r = .668$ ）が3年間（ $r = .384$ ）、4年間（ $r = .237$ ）、5年間（ $r = .317$ ）よりもそれぞれ有意に高かった（順に $z = 2.12, p < .05$ ； $z = 2.92, p < .01$ ； $z = 2.54, p < .05$ ）。SI得点では3年間（ $r = -.065$ ）や5年間（ $r = -.068$ ）が1年間（ $r = .382$ ）よりも低い傾向にあった（順に $z = 1.76, p < .10$ ； $z = 1.73, p < .10$ ）。平均評定値では1年間（ $r = .607$ ）が4年間（ $r = .236$ ）よりも有意に高かった（ $z = 2.36, p < .05$ ）が、他の期間の間には有意差がなかった。

表2 同一ソシオメトリック地位得点の縦断的相関係数（男女全体）

対象集団	期 間	ソシオメトリック地位得点				
		L得点	D得点	SP得点	SI得点	平均評定値
A 幼児→小1 (N=59)	1年間	.608***	.567***	.668***	.382**	.607***
B 幼児→小2 (N=54)	2年間	.437**	.402**	.508***	.260+	.445***
C 幼児→小3 (N=57)	3年間	.100	.435***	.384**	-.065	.370**
D 幼児→小4 (N=52)	4年間	.230	.207	.237+	.187	.236+
E 幼児→小5 (N=57)	5年間	.170	.249+	.317*	-.068	-

+ : $p < .10$ * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

(2)同一期間の異なる得点間の比較 表2の相関値に基づいて、相関値の絶対値の差を横に比較してみると、A集団（1年間の期間）ではL得点（ $r = .608$ ）、D得点（ $r = .567$ ）、SP得点（ $r = .668$ ）および平均評定値（ $r = .607$ ）の4得点がそれぞれSI得点（ $r = .382$ ）よりも有意に高いか高い傾向にあった（順に $z = 1.91$, $p < .10$; $z = 1.67$, $p < .10$; $z = 2.16$, $p < .05$; $z = 1.65$, $p < .10$ ）。C集団（3年間の期間）ではD得点（ $r = .435$ ）、SP得点（ $r = .384$ ）、平均評定値（ $r = .370$ ）の3得点がそれぞれL得点（ $r = .100$ ）よりも有意に高いか高い傾向にあった（順に $z = 2.08$, $p < .05$; $z = 3.14$, $p < .01$; $z = 1.89$, $p < .10$ ）。また、D得点（ $r = .435$ ）、SP得点（ $r = .384$ ）、平均評定値（ $r = .370$ ）の3得点がそれぞれSI得点（ $r = -.065$ ）よりも有意に高かった（順に $z = 3.17$, $p < .01$; $z = 2.49$, $p < .05$; $z = 2.36$, $p < .05$ ）。E集団（5年間の期間）ではD得点（ $r = .249$ ）とSP得点（ $r = .317$ ）の2得点がそれぞれSI得点（ $r = -.068$ ）よりも有意に高いか高い傾向にあった（順に $z = 1.93$, $p < .10$; $z = 2.04$, $p < .05$ ）。しかし、B集団（2年間の期間）とD集団（4年間の期間）ではいずれの得点間にも有意差が見られなかった。

地位維持者と地位変動者の比較

表3は、A集団の1回目（幼児時点）の地位分類の結果と2回目（小1時点）の地位分類の結果を組み合わせて、同一地位の維持者および地位の変動者の人数内訳を示したものである。表3の（ ）内の数値は1回目の幼児時点の地位を基準にして同一地位維持者および地位変動者の比率（%）を示したものである。たとえば、幼児時点の人気児は14名であるが、その中で小1時点も人気児であった者は7名であり、その比率は $7/14$ （50.0%）にあたる。幼児時点の人気児の中で小1時点は拒否児であった者は0名であり、その比率は $0/14$ （0.0%）にあたる。表4（B集団）～表7（E集団）の地位分類表についても、表3と同様にして同一地位維持者および地位変動者の人数とその比率（%）を算出している。

表3～表7を通して全般的に指摘できることは、幼児時点において人気児であった者は1年間～5年間の期間を経ても人気児という同一地位を維持している者の比率が高いことである。ただし、3年間の期間（表5）では人気児から平均児へ変動した者（46.1%）が他の期間の20%台に比べてかなり高い比率を示した。そのためか、人気児の同一地位を維持した者（38.5%）が第2位の比率になっている。幼児時点において拒否児であった者は1年間～3年間を経ても、拒否児という同一地位を維持する者が多くなっている。しかし、4年間（表6）や5年間（表7）を経ると、拒否児の地位を維持する者よりも拒否児から無視児へと変動する者が最も多く

表3 A集団における幼児時点と小1時点の地位群分類の人数内訳（%）

幼児時点 の地位群	小1時点の地位群					全 体
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	7(50.0)	0(0.0)	4(28.6)	1(7.1)	2(14.3)	14(100.0)
拒否児	0(0.0)	5(45.5)	6(54.5)	0(0.0)	0(0.0)	11(100.0)
平均児	3(13.0)	3(13.0)	10(43.5)	7(30.5)	0(0.0)	23(100.0)
無視児	2(25.0)	2(25.0)	3(37.5)	1(12.5)	0(0.0)	8(100.0)
両論児	0(0.0)	1(33.3)	0(0.0)	1(33.3)	1(33.3)	3(99.9)
計	12	11	23	10	3	59

幼児のソシオメトリック地位の長期的持続と変動

表4 B集団における幼児時点と小2時点の地位群分類の人数内訳(%)

幼児時点 の地位群	小2時点の地位群					全 体
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	8(57.1)	0(0.0)	4(28.6)	2(14.3)	0(0.0)	14(100.0)
拒否児	2(16.7)	7(58.3)	0(0.0)	2(16.7)	1(8.3)	12(100.0)
平均児	3(30.0)	4(40.0)	1(10.0)	2(20.0)	0(0.0)	10(100.0)
無視児	1(9.1)	3(27.3)	5(45.4)	2(18.2)	0(0.0)	11(100.0)
両論児	1(14.3)	2(28.6)	2(28.6)	1(14.3)	1(14.3)	7(100.1)
計	15	16	12	9	2	54

表5 C集団における幼児時点と小3時点の地位群分類の人数内訳(%)

幼児時点 の地位群	小3時点の地位群					全 体
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	5(38.5)	0(0.0)	6(46.1)	1(7.7)	1(7.7)	13(100.0)
拒否児	1(7.7)	4(30.8)	4(30.8)	3(23.0)	1(7.7)	13(100.0)
平均児	6(27.3)	5(22.7)	7(31.8)	4(18.2)	0(0.0)	22(100.0)
無視児	5(62.5)	1(12.5)	1(12.5)	1(12.5)	0(0.0)	8(100.0)
両論児	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
計	18	10	18	9	2	57

表6 D集団における幼児時点と小4時点の地位群分類の人数内訳(%)

幼児時点 の地位群	小4時点の地位群					全 体
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	6(42.9)	1(7.1)	3(21.4)	2(14.3)	2(14.3)	14(100.0)
拒否児	2(16.7)	2(16.7)	3(25.0)	5(41.6)	0(0.0)	12(100.0)
平均児	2(22.2)	2(22.2)	3(33.4)	1(11.1)	1(11.1)	9(100.0)
無視児	3(30.0)	3(30.0)	2(20.0)	2(20.0)	0(0.0)	10(100.0)
両論児	2(28.5)	3(42.9)	1(14.3)	1(14.3)	0(0.0)	7(100.0)
計	15	11	12	11	3	52

表7 E集団における幼児時点と小5時点の地位群分類の人数内訳(%)

幼児時点 の地位群	小5時点の地位群					全 体
	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児	
人気児	8(50.0)	2(12.4)	4(25.0)	1(6.3)	1(6.3)	16(100.0)
拒否児	1(7.7)	4(30.8)	2(15.4)	5(38.4)	1(7.7)	13(100.0)
平均児	6(26.1)	1(4.3)	6(26.1)	9(39.2)	1(4.3)	23(100.0)
無視児	2(50.0)	1(25.0)	1(25.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(100.0)
両論児	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	1(100.0)
計	17	8	13	16	3	57

なっている。これらに対して、幼児時点において無視児であった者は1年後（表3）や2年後（表4）では平均児へ変動する者が最も多いが、3年間～5年間を経ると人気児や拒否児へと変動する者の比率が次第に高くなっている。

同一地位維持者率の比較

表8は、表3～表7の中から同一地位維持者の人数とその比率（％）だけを取り出して、一覧表にしたものである。表8から、人気児の地位維持者率は最低の38.5％（C集団）から最高の57.1％（B集団）にわたっており、期間が長くなっても大きく低下しないことがわかる。拒否児の地位維持者率も、1年間～3年間（A集団～C集団）にかけては人気児の同一地位維持者率に匹敵する高い比率を示しているが、4年間以降になると人気児の維持者率よりも低下する傾向にある。平均児の同一地位維持者率は、2年間（B集団）において10％と落ち込んでいるが、他の4集団では拒否児の維持者率とほぼ同等である。無視児の地位維持者率は1年間（A集団）からすでに低く、いずれの期間においても地位の変動率が高いことがわかる。

表8 同一地位維持者の人数内訳と比率（％）

	人気児	拒否児	平均児	無視児	両論児
A 幼児→小1	7/14(50.0)	5/11(45.5)	10/23(43.5)	1/ 8(12.5)	1/ 3(33.3)
B 幼児→小2	8/14(57.1)	7/12(58.3)	1/10(10.0)	2/11(18.2)	1/ 7(14.3)
C 幼児→小3	5/13(38.5)	4/13(30.8)	7/22(31.8)	1/ 8(12.5)	0/ 1(0.0)
D 幼児→小4	6/14(42.9)	2/12(16.7)	3/ 9(33.4)	2/10(20.0)	0/ 7(0.0)
E 幼児→小5	8/16(50.0)	4/13(30.8)	6/23(26.1)	0/ 4(0.0)	0/ 1(0.0)
計	34/71(47.9)	22/61(36.1)	27/87(31.0)	6/41(14.6)	2/19(10.5)

地位変動者の変動パターンの比較

表9は、人気児の地位から他の4つの地位のいずれかに地位変動を示した者に基づいて、それぞれの地位変動パターンを人数と比率（％）で示したものである。表9から、全般的に人気児は平均児へ変動する比率（29.6％）が最も高く、次いで無視児（9.9％）や両論児（8.5％）への変動者率が続き、人気児から拒否児へと変動する者（4.2％）は極めて少ないことがわかる。人気児から平均児への変動者率は、時間経過が1年間から5年間を通して最も高く、共通している。しかし、時間経過が4年間や5年間になると、人気児から拒否児へ変動する者（順

表9 人気児の地位変動パターンに関する人数内訳（％）

	1回目の地位群→2回目の地位群			
	人気児→拒否児	人気児→平均児	人気児→無視児	人気児→両論児
A 幼児→小1	0/14(0.0)	4/14(28.6)	1/14(7.1)	2/14(14.3)
B 幼児→小2	0/14(0.0)	4/14(28.6)	2/14(14.3)	0/14(0.0)
C 幼児→小3	0/13(0.0)	6/13(46.1)	1/13(7.7)	1/13(7.7)
D 幼児→小4	1/14(7.1)	3/14(21.4)	2/14(14.3)	2/14(14.3)
E 幼児→小5	2/16(12.4)	4/16(25.0)	1/16(6.3)	1/16(6.3)
計	3/71(4.2)	21/71(29.6)	7/71(9.9)	6/71(8.5)

幼児のソシオメトリック地位の長期的持続と変動

に7.1%と12.4%)も少しずつ出現してくることがわかる。

表10は表9と同様にして、拒否児の地位変動パターンを示したものである。表10から、全般的に拒否児は平均児や無視児への変動者率(ともに24.6%)が高いが、人気児(9.8%)や両論児(4.9%)へ変動する者は少ないことがわかる。時間経過に伴う変化をみると、拒否児から平均児へ変動する者は次第に低下し、代わりに無視児へと変動する者が次第に増加する傾向にあることがわかる。

表10 拒否児の地位変動パターンに関する人数内訳(%)

	1回目の地位群→2回目の地位群			
	拒否児→人気児	拒否児→平均児	拒否児→無視児	拒否児→両論児
A 幼児→小1	0/11(0.0)	6/11(54.5)	0/11(0.0)	0/11(0.0)
B 幼児→小2	2/12(16.7)	0/12(0.0)	2/12(16.7)	1/12(8.3)
C 幼児→小3	1/13(7.7)	4/13(30.8)	3/13(23.0)	1/13(7.7)
D 幼児→小4	2/12(16.7)	3/12(25.0)	5/12(41.6)	0/12(0.0)
E 幼児→小5	1/13(7.7)	2/13(15.4)	5/13(38.4)	1/13(7.7)
計	6/61(9.8)	15/61(24.6)	15/61(24.6)	3/61(4.9)

表11は、平均児の地位変動パターンを示したものである。表11から、平均児は無視児(26.4%)、人気児(23.0%)、拒否児(17.2%)の3つの地位へほぼ均等に変動する傾向にあるが、両論児へ変動する者(2.3%)は極めて少ないことがわかる。

表12は、無視児の地位変動パターンを示したものである。1年間や2年間の時間経過では、

表11 平均児の地位変動パターンに関する人数内訳(%)

	1回目の地位群→2回目の地位群			
	平均児→人気児	平均児→拒否児	平均児→無視児	平均児→両論児
A 幼児→小1	3/23(13.0)	3/23(13.0)	7/23(30.5)	0/23(0.0)
B 幼児→小2	3/10(30.0)	4/10(40.0)	2/10(20.0)	0/10(0.0)
C 幼児→小3	6/22(27.3)	5/22(22.7)	4/22(18.2)	0/22(0.0)
D 幼児→小4	2/9(22.2)	2/9(22.2)	1/9(11.1)	1/9(11.1)
E 幼児→小5	6/23(26.1)	1/23(4.3)	9/23(39.2)	1/23(4.3)
計	20/87(23.0)	15/87(17.2)	23/87(26.4)	2/87(2.3)

表12 無視児の地位変動パターンに関する人数内訳(%)

	1回目の地位群→2回目の地位群			
	無視児→人気児	無視児→拒否児	無視児→平均児	無視児→両論児
A 幼児→小1	2/8(25.0)	2/8(25.0)	3/8(37.5)	0/8(0.0)
B 幼児→小2	1/11(9.1)	3/11(27.3)	5/11(45.4)	0/11(0.0)
C 幼児→小3	5/8(62.5)	1/8(12.5)	1/8(12.5)	0/8(0.0)
D 幼児→小4	3/10(30.0)	3/10(30.0)	2/10(20.0)	0/10(0.0)
E 幼児→小5	2/4(50.0)	1/4(25.0)	1/4(25.0)	0/4(0.0)
計	13/41(31.7)	10/41(24.4)	12/41(29.3)	0/41(0.0)

無視児は平均児や拒否児へ変動する者が多いが、時間経過が長くなるにつれて人気児へと変動する者の比率が高くなっている。無視児は平均児と同様に、他の地位へ変動しやすい地位にあるが、期間が長くなると、平均児以上に人気児へ変動する者が出現しやすいといえる。

表13は、両論児の地位変動パターンを示したものである。両論児の地位に分類される者が少ないので、変動者の比率は一人の移動でも大きく変化している。5つの集団の合計人数で見ると、両論児はいずれの地位へもほぼ均等に変動する可能性があるように思われる。

表13 両論児の地位変動パターンに関する人数内訳 (%)

	1回目の地位群→2回目の地位群			
	両論児→人気児	両論児→拒否児	両論児→平均児	両論児→無視児
A 幼児→小1	0/ 3(0.0)	1/ 3(33.3)	0/ 3(0.0)	1/ 3(33.3)
B 幼児→小2	1/ 7(14.3)	2/ 7(28.6)	2/ 7(28.6)	1/ 7(14.3)
C 幼児→小3	1/ 1(100.0)	0/ 1(0.0)	0/ 1(0.0)	0/ 1(0.0)
D 幼児→小4	2/ 7(28.5)	3/ 7(42.9)	1/ 7(14.3)	1/ 7(14.3)
E 幼児→小5	0/ 1(0.0)	0/ 1(0.0)	0/ 1(0.0)	1/ 1(100.0)
計	4/19(21.1)	6/19(31.6)	3/19(15.8)	4/19(21.1)

考 察

ソシオメトリック地位得点の安定性について

表2から、幼稚園の年長児時点から1年間や2年間経過しても、ソシオメトリック地位得点は極めて高い安定性を示すことがわかる。本研究の1年間（年長幼児→小1）の相関値と前田（1997）の1年間（年中幼児→年長幼児）の相関値を比較すると、L得点（順に $r = .608$, $p < .001$; $r = .484$, $p < .001$ ）、D得点（順に $r = .567$, $p < .001$; $r = .580$, $p < .001$ ）、SP得点（順に $r = .668$, $p < .001$; $r = .619$, $p < .001$ ）、SI得点（順に $r = .382$, $p < .01$; $r = .212$, $p < .02$ ）、平均評定値（順に $r = .607$, $p < .001$; $r = .679$, $p < .001$ ）となる。L得点やSI得点の相関値は本研究の方がむしろ前田（1997）よりも高く、他の得点でもほぼ前田（1997）の相関値に匹敵する値を示している。本研究の1年間では幼稚園から小学校への移行期にあたり、クラス数が増加するだけでなく、クラスの再編もなされている。したがって、クラスの成員構造も変化している。それに対して、前田（1997）の対象集団は年中幼児から年長幼児にかけて同じクラス成員から構成される持ち上がりクラスであり、クラスの成員構造は不変である。本研究のクラス構造が変化していることを考慮すると、年長幼児から得られたソシオメトリック地位得点は、たとえ仲間関係に多少の変化があったとしても1年後の地位を十分に予測する力を備えているといえる。

同様にして、本研究の2年間（年長幼児→小2）の相関値と前田（1997）の1年半間（年中幼児→年長幼児）の相関値を比較すると、L得点（順に $r = .437$, $p < .01$; $r = .482$, $p < .001$ ）、D得点（順に $r = .402$, $p < .01$; $r = .564$, $p < .001$ ）、SP得点（順に $r = .508$, $p < .001$; $r = .580$, $p < .001$ ）、SI得点（順に $r = .260$, $p < .10$; $r = .340$, $p < .001$ ）、平均評定値（順に $r = .445$, $p < .001$; $r = .540$, $p < .001$ ）となる。いずれの得点の相関値も、本研究の方が前田（1997）よりもやや低いが、半年間の期間の相違やクラス成員

構造の変化を考慮すると、本研究の相関値は前田（1997）の相関値に匹敵する値を示していると考えられる。前田（1998）は同じ2年間ではあるが、小2→小4の2年間の相関値を報告している。本研究の2年間の相関値と前田（1998）の相関値を順に比較すると、L得点（順に $r = .437$, $p < .01$; $r = .354$, $p < .001$ ）、D得点（順に $r = .402$, $p < .01$; $r = .362$, $p < .001$ ）、平均評定値（順に $r = .445$, $p < .001$; $r = .538$, $p < .001$ ）となる。L得点やD得点の相関値は本研究の方がむしろ高いことから、年長幼児から得られた地位得点は小2時点と同程度以上の予測力をもつ確かな地位情報を提供するといえる。

ところで、L得点の相関値は3年後（小3時点）になると急激に低下するが、D得点の相関値は3年後（小3時点）でも有意な高い相関値を示した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を、D得点は仲間から積極的に拒否される程度をあらわしていることを考慮すると、これらの結果は仲間から好かれる程度よりも、拒否される程度の方が長期的に一貫しやすいことを実証するものである。従来の研究（Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; 前田, 1995; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993）から示唆されるように、仲間から拒否されやすい子どもは攻撃的な行動を持続しやすいので、仲間から敬遠され続ける傾向にあるのかもしれない。あるいは、仲間から拒否されやすい子どもに対して、仲間は一緒に活動したり交流する機会を避けやすいので、いつまでも拒否されやすい子どもの仲間評価が変化しないのかもしれない。本研究からは拒否児自身の対人行動に問題があるのか、あるいは仲間評判の影響があるのかを決定することはできないが、現実にはこれら両要因が作用しているのではないかと考えられる。また、幼児期から4年間や5年間を経過すると、D得点、SP得点および平均評定値の安定性も低下している。おそらく、小4や小5になると、仲間関係や地位を決定する基準が幼児期と異なってくるからであろう。

同一地位の維持者率について

表8から、人気児や拒否児の地位維持者率は期間が長くなっても、それほど大きく低下しなかった。本研究の結果とCoie & Dodge (1983)の結果を順に比較すると、人気児の地位維持者率は1年間（順に50%と36%）、2年間（順に57%と28%）、3年間（順に39%と34%）、4年間（順に43%と21%）となる。いずれの期間でも、本研究の維持者率が高いことがわかる。特に、1年間と2年間では両研究間の差が大きい。同様に、拒否児の地位維持者率を順に比較すると、1年間（順に46%と45%）、2年間（順に58%と34%）、3年間（順に31%と34%）、4年間（順に17%と30%）となる。本研究の対象集団はいずれも人数が少ないので、比率に変動が生じやすい。それでも、本研究の4年間の比率が少し低いものの、他の期間はCoie & Dodge (1983)の同一対象児を追跡した結果とほぼ同様である。最後に、無視児の地位維持者率を順に比較すると、1年間（順に13%と25%）、2年間（順に18%と27%）、3年間（順に13%と22%）、4年間（順に20%と24%）となる。無視児の維持者率は本研究の方が全般に低く、より変動しやすいように思われる。

前田（1998）の小2から小4までの2年間についても、本研究と同様にして同一地位の維持者率を算出すると、人気児が48%、拒否児が40%、平均児が29%、無視児が6%となる。本研究の2年間では人気児が57%、拒否児が58%、平均児が10%、無視児が18%を示し、人気児や拒否児の比率は前田（1998）の結果よりもむしろ高い。これらの先行研究結果と本研究の結果を合わせると、幼児期の人気児や拒否児の地位はいったん確立すると、容易には変動せず、3

年間から4年間の期間を経ても維持されやすいと指摘できる。人気児や拒否児の地位変動は単なる期間の長さに依存しないことは、幼児期や小学校低学年の段階では子ども自身が集団内で占める自己の地位に気づいていないか、気づいていても自発的に自己の仲間関係や対人行動を変容させる手段をもたない可能性を示唆する。特に、拒否児の長期的な維持率を考慮すると、早期的・予防的観点から早めに教師や大人による介入指導や支援をしていく必要があると考えられる。

地位変動パターンについて

人気児から他の地位へと地位が変動する場合には平均児(29.6%)へ変動することが最も多く、いきなり拒否児(4.2%)へ変動する者は極めて少なかった(表9)。逆に、拒否児から他の地位へと地位が変動する場合には、平均児(24.6%)や無視児(24.6%)へ変動することが多く、人気児(9.8%)へ変動する者は少なかった(表10)。それに対して、無視児の地位変動パターンでは人気児(31.7%)へ変動するだけでなく、平均児(29.3%)や拒否児(24.4%)へ変動する者もかなり存在する。また、平均児→無視児や無視児→平均児の変動は期間が短くても出現しやすいが、無視児→人気児の変動は期間が長くなるにつれて出現率が次第に高くなっている。これらの変動パターンを総合すると、いきなり人気児から拒否児へ変動したり、逆に拒否児から人気児へ変動することは少なく、途中に無視児や平均児の地位を経由して変動していく場合が多いのではないかと考えられる。

要 約

本研究では、幼稚園の年長児時点において1回目のソシオメトリック法を実施し、それから1年間(A集団)、2年間(B集団)、3年間(C集団)、4年間(D集団)、5年間(E集団)の期間が経過した時点で2回目のソシオメトリック法を実施した。1回目と2回目のソシオメトリック法に基づく地位分類の結果を組み合わせ、1年間～5年間にわたる地位の維持者率や変動者率を調べ、どの地位群の維持者率が高いかを比較検討した。また地位の変動が生じる場合には、どのような変動パターンが多いのかについても検討を加えた。さらに、ソシオメトリック地位得点の相関分析からも、時間経過に伴う地位得点の安定性の変化について検討した。主な結果は以下のとおりであった。

①ソシオメトリック地位得点の安定性(縦断的相関値)は、どの期間でもS I得点が最も低かった。

②L得点の安定性は3年間を経過すると、急激に低下した。しかし、D得点、SP得点および平均評定値は3年間を経過しても、有意な高い正相関を示した。

③地位分類に基づく同一地位維持者率では、期間の長さにかかわらず、人気児や拒否児が高く、次いで平均児が続き、無視児が最も低かった。

④人気児や拒否児の地位が変動する場合には、平均児や無視児へと変動することが多く、人気児→拒否児や拒否児→人気児の変動は少なかった。特に、期間が長くなるにつれて、無視児→人気児の変動率が高くなった。

これらの結果は、幼児期の人気児や拒否児の地位はいったん確立すると、容易には変動せず、3年間から4年間の期間を経ても、なお維持されやすいことを実証するものである。

引用文献

- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status: A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 261-282.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. Cambridge: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤 (監訳) 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ— pp. 14-62. 北大路書房
- Hughes, J. 1990 Assessment of social skills: Sociometric and behavioral approaches. In C. R. Reynolds & R. W. Kamphaus (Eds.), *Handbook of psychological and educational assessment of children: Personality, behavior, and context*. pp. 423-444. New York: Guilford Press.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2, pp. 251-297. Greenwich: JAI Press.
- 前田健一 1995 児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性、引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, 43, 156-166.
- 前田健一 1997 幼児の仲間関係に関する研究：ソシオメトリック地位の2年間にわたる持続と変動 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学, 44, 1, 91-109.
- 前田健一 1998 子どもの仲間関係と社会的行動特徴に関する縦断的研究 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学, 44, 2, 61-77.
- McConnell, S. R., & Odom, S. L. 1986 Sociometrics: Peer-referenced measures and the assessment of social competence. In P. S. Strain, M. J. Guralnick, & H. M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. pp. 215-284. New York: Academic Press.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.

付記 本研究は文部省科学研究費補助金基盤研究C-2 課題番号08610135 (平成8年度～平成10年度)の援助によるものである。本研究の資料収集にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園と附属小学校の先生方と園児・児童の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集と整理にあたって援助してくれた大学生の皆さんに感謝します。